

❖ 曲目解説 ❖

『牧神の午後への前奏曲』は、ドビュッシーを世に知らしめた曲である。冒頭の2小節の牧神の笛の音のメロディーがこの曲全体を貫いている。と同時に和声的にも、このメロディーの内に潜むドビュッシー特有の和声付けが全てと言える。印象派として音楽史上に位置するドビュッシーは、古典的理性やロマン的激情に支えられた『調性』音楽を超えた存在である。そして20世紀の芸術音楽の先駆者の1人でもある。

「もの憂い夏の昼下り、牧神は芦笛の声を切り取った水辺で水の精女を見つける。微睡む牧神は夢の中で水の精女を慕う。やがて牧神の情熱は空想の世界を疾走し、ヴィーナスをも抱擁する。何時しか砂上に横になった牧神は、寝りながら倦怠感に包まれていく。」以上がマラルメの詩『牧神の午後』の大意である。ドビュッシーは、この象徴詩を音楽によって再現しているのが、マラルメ以上に聴者に影像を印象付ける。陽炎の向うに居る牧神の姿が冒頭2小節のテーマと共に忘れ得ないものとなるのだ。

『ハフナー』は、1782年夏に作曲された。一昨年ザルツブルク大司教と訣別したモーツァルトにとっては、この年は重大な意味を持つ。アウガルチンでのコンサートが5月末に始められ、『後宮よりの逃走』も7月には初演されている。またコンスタンツェとの結婚は8月4日に行なわれた。彼のウィーンでの大成功の始まりの年であると同時に、公私に多忙の年であった。このような状況の下でモーツァルトは、『ハフナー』を父レオポルトの依頼で、当時ザルツブルク市長で銀行家のジークムント・ハフナーの為に作曲するのである。がしかし、父レオポルトはこの時モーツァルトの結婚に対して悲観的な態度をとっていたし、また初めセレナードとして書かれたこの曲も期限の7月27日を10日も遅れて8月7日にザルツブルクに届くのである。曲全体はこれらの状況に反し、動的な力量感あふれる、しかも艶麗さを持ったものになっている。逆境にあればある程、音楽に楽園を求めようとしたモーツァルトの態度が表われている作品と言えるかも知れない。

メンデルスゾーンは、20歳の夏にスコットランドに旅して、古城ホルルードの遺跡を見た。『スコットランド』は、この時得られた靈感を12年もの間暖めて33歳の冬にベルリンで完成された。この年1842年3月にライプチヒ・ゲバントハウスで彼自身の指揮で初演され、次いで同年6月ロンドン・フィルハーモニー協会でも演奏されて、この時ヴィクトリア女王に献呈されている。女王階下の9代前のスコットランド女王メリーがホルルード城主であり、その寵臣リジオがここで暗殺されたのは知る人ぞ知る話である。

彼はこの交響曲の4つの楽章を切れ目なしに演奏するようにしているし、第2楽章にスケルツォを第3楽章に緩徐楽章を置いている。これは、『スコットランド』をより詩情豊かなものにしていく。またメンデルスゾーン特有の旋律美と均等な構成は、ホルルード城の面影を深めると共に、一方で緩慢にならない為の箍でもある。

曲はスコットランドの四季を語っていると私には思われる。長い冬が終わるとやがて春が訪ずれる。『嵐が丘』で有名なヒースの花がホルルードの荒地に波打っている。そして短いけれども活気のある夏が来る。農牧民達の邪気のない歓びを表わしているようだ。秋は先ず森にやって来て、厳かに全てを包み込んでしまう。実りの秋を喜ぶと同時に彼らは長い冬への準備を怠らない。冬は雄々しく、突然来る。まるで冬将軍の行進のように、4楽章は戦闘的である。終結部は、スコットランドの伝統と尚武の気風をそのまま音にしている。勇猛果敢な民俗楽器バグパイプの闘志が伝わって来る。この曲は描写音楽と言うよりもスコットランドのイメージを音にした作品と言えるだろう。

(藤井部 勉)